

書評 鈴木順子著
『シモーヌ・ヴェイユ「歓び」の思想』
(藤原書店、2023年)

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2024-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000534

書評 鈴木順子著
『シモーヌ・ヴェイユ「歓び」の思想』
(藤原書店、2023年)

安 永 愛

『重力と恩寵』『根をもつこと』『工場日記』などの著作で知られるシモーヌ・ヴェイユ (Simone Weil 1909-1944)。人文学のエリート校であるパリ高等師範学校に学び、哲学教師として各地のリセで教えながら、常に弱い立場に置かれる人々に思いを寄せ、工場労働や農作業にも従事、社会活動家としても生きた。ユダヤ系であったヴェイユは第二次世界大戦の戦況が困難を極める中、ロンドンにて34歳で客死した。生前は一冊の著作も持っていなかった。

透徹した美しさと魂の衝迫に満ちたヴェイユの言葉、そして彼女の生き方は、凡人を圧倒するものだと評者は常々感じてきた。本書の著者鈴木順子は、博士論文を元にした前著『シモーヌ・ヴェイユ 犠牲の思想』(藤原書店、2012年)で、徹底的に「他者を生かす」ことに賭けたヴェイユの思想と生涯を貫くものとして、特に晩年に顕になってきた「犠牲」の観念に着目し、丁寧に跡付け、ヴェイユの激しい善への渴望を描いていた。

「孤高の聖女」の印象の強いヴェイユだが、本書において著者は、「孤高の聖女」というのは、シモーヌ・ヴェイユの一面のみを取り出した紋切り型に過ぎず、ヴェイユの善への情熱の基盤として、何より「歓び」が根本にあったことを示している。本書の帯に「弱さ、矛盾を抱えつつ「歓び」に生きるありのままのヴェイユ。」とあるとおり、まさにそのようなヴェイユを、彼女の人生の様々な側面を捉えつつ生き生きと描き出しているのである。

ヴェイユについてある程度知っている人にとっても、初めてヴェイユを知る人にとっても、本書は豊かな視点をもたらしてくれる。圧倒するヴェイユというのではなく、このような女性がいたら言葉を交わしてみたい、あるいは、ヴェイユにそんなに悩まなくてもいいじゃないの、と思わず声をかけてみたくなるように感じさせる、そのようなものが本書にはある。

ヴェイユは医者である父、音楽を愛する母のもとに生まれ、後に数学者として大成することになる兄アンドレには、常に劣等感を抱いていたという。兄妹

とでは、倫理的、宗教的指向性に大きな違いがあり、日常的に深く話し合ったりした訳ではなかったが、戦争拒否をした兄アンドレがスパイ容疑で投獄され、その時に二人は書簡を交わし合っている。この「獄中書簡」は極めて知的なものである。著者は、ギリシャ数学やニーチェといったテーマについて意見を交わす二人の書簡を読み解きつつ、そこに文理の粋や専門を超えたりベラルアーツ的な対話が成立していることを丁寧に論じている。兄との往復書簡から浮かび上がってくるヴェイユの科学観の根底には、ことに「均衡」を重視したギリシア哲学の延長線上である「世界の美」への確信がある。そして対話すること自体への情熱が溢れている。ここにもヴェイユの「歓び」の思想を見ることが出来る。

本書では、兄に示唆されてヴェイユが読むようになった鈴木大拙の書物と、彼女の宗教観の関連についても論じられている。深くキリスト教やギリシャ哲学で育まれてきたヴェイユが禅の思想をどのように受け止めたか、それを著者は「異文化間対話」として捉えている。そこには、やはり他者を知ろうとすること、異文化の良きものを己れのものとする事へのヴェイユの情熱が迸っているのである。

本書で取り上げられているもう一つのテーマが教育者としてのヴェイユである。著者によれば、哲学者、社会活動家、神秘家としてのヴェイユについての研究の蓄積は厚いものの、教育者として取り上げたものは少ないという。本書では、彼女が教育者として影響を受けたアラン、ルテリエ、ラニョーの思想の骨子が記され、ヴェイユが教育に携わった5つの高校での教育活動が取り上げられている。生徒の証言からは、平穏な生活や個人的利害より生徒を優先していた情熱的な教師像が浮かんでくる。ヴェイユは生徒に作文を促し、その添削を熱心に行ない、教室外でも生徒との交流を大切にしていた。リセで教えるのみならず、漁民や労働者や療養所の患者仲間にも教えていたという。教えることに歓びを見出していたヴェイユの姿がある。著者は、ヴェイユの教育の特質として「相手を知り、相手の成長に合わせること」「専門知だけでなく経験値も含む人文知を大切にすること」「自由な市民の創造を目的とすること」の三つを指摘している。

4章からなる本書の第3章は、「愛すること、死ぬこと」と題され、第1節「純粋な性愛の可能性」では、ヴェイユがフィリアとしての愛（友人への愛）やエロシ的な愛についてどのように考えていたのかに論及している。友人から手紙の返事が来ないことを悲しむヴェイユの言葉なども紹介されていて微笑まし

い。一方で、愛についてのヴェイユの次の言葉はやはり凡人を圧倒しているとも感じられるものだ。すなわち「他の人たちがそのままに存在するのを信じるのが、愛である」と。ヴェイユは、愛の名のもとに「支配」「所有」「隷従」の事態に陥ることに強い忌避感を持っていた。そうした事態を免れるとき「純粋な性愛」が成立するということになる。ヴェイユは決して肉体的な欲望や性愛を低次のものに置いたわけではなかったと著者は指摘する。

本書に挟まれた4つの「コラム」のうちの一つは「ヴェイユと恋愛」と題され、ヴェイユが二十代前半の頃に交流のあったピエール・ルテリエ（彼女が尊敬していた哲学者レオン・ルテリエの末子）へのヴェイユの想いについて触れている。ヴェイユはピエールに友情以上の想いを抱いたのは事実なのだが、相手をエゴイズムで左右する、あるいは左右されるような関係に至ることをヴェイユは良しとしなかった、それゆえピエールとは友人のまま人生の歩みを別にすることを選んだのではないか。そのように、ヴェイユの残したメモを手がかりに著者は推察している。決して「聖女」などではなかったヴェイユの迷いや哀しみに私たちも共感することができる。

第4章は「食」の肯定と「聖なる拒食」と題されている。中でも、34歳で亡くなったヴェイユの「自殺説」を、事実に基づき丹念に否定しているのが注目される。ヴェイユには、そもそも「食」の喜びを大切にす姿勢と、第二次世界大戦の困窮の中で飢えている人々を思い、食糧を譲るために食を拒否する「聖なる拒食」とがあったという。しかし、彼女が34歳での死に至ることになったのは、「食を拒否」しての帰結ではないと著者は指摘する。結核の病魔に冒されていたヴェイユが亡くなるその年、ロンドンの病院に移った頃には、睡眠不足のまま執筆を続けるという無理が祟って、すでに消化の機能が低下していた胃は、滋養を受けることができなくなっていた。見舞い客の証言から、ヴェイユが食べようとする意思を失っておらず、断食を貫いたわけではないことが明らかである。ヴェイユ自殺説は、ヴェイユの死を「フランス人の教授、みずから飢えて死す」との見出しのもと報道したイギリスの新聞記事の誤りに由来すると著者は指摘する。

ヴェイユは死というものを必ずしも暗黒とは捉えず、「私」と世界とが一体化する歓びであると知っていた、と著者は断じている。確かに、そのような死への受容的態度あってこそ、病身にあつて、己れを焼き尽くすような集中力で執筆したり、『バカバッドギータ』を読んだり、サンスクリット語を学んだりする情熱を持つことができたのであろう。

もう一つ、第4章で注目されるのが、ヴェイユの摂食障害と母との関係についてである。ヴェイユには飢餓する者を思い、節食・拒食するという哲学思想的な背景があったが、そもそも彼女の意志的な節食や拒食には、彼女の母セルマとの関係が大きく関わっているのではないかと著者は指摘しているのである。セルマは教育熱心であったが、アンドレもシモーヌも母親に対して息苦しさを覚えていたことがわかっている。アンドレはインドに就職することで母親から距離を置くことができたが、シモーヌの方はそうはいかなかった。シモーヌが地方のリセで働き始めても、彼女の生活上の不都合を先回りして解決するなど、過保護な面があったという。しかし、シモーヌは成人してもそうした母の干渉を撥ねつけるには繊細すぎた。そうした矛盾した母娘関係がシモーヌを摂食障害に追い込んだのではないかとというのが著書の推察である。

仰ぎ見るような知性と信念と行動力を有する奇跡的な女性と思われてきたシモーヌ・ヴェイユではあるが、彼女が最も身近な人間関係での躓きがあったと知るのには、意外の感もあり、またそうした苦しみのもとにあったヴェイユを我々は身近に感じることができるのではないだろうか。

本書のコラムには、ヴェイユの好んだ音楽や食べ物についても紹介されている。音楽好きの家庭で育ち、様々な音楽に触れる機会をヴェイユは持っていたが、彼女は力を誇示するタイプの音楽（ワグナーなどの後期ロマン派）を嫌い、憂いを帯びたバッハの緩徐楽章（ブランデンブルク協奏曲第4番第2楽章）やモンテヴェルディの『ポッペアの戴冠』に魅了されていたという。力より純粹さや清楚さを好んだのである。グレゴリオ聖歌で有名なソレム修道院でのミサでヴェイユは「イエスが自分に入ってくる」といういわゆる神秘体験をするのだが、彼女が心を奪われた音楽に耳を傾けることで、私たちはヴェイユを一層近しく感じることができるだろう。彼女の好んだ素朴なメニューのレシピも本書に細かく記されているので、再現して味わっていただくのも一興だろう。

「苦しみ」や「不幸」のイメージと結ばれがちなヴェイユだが、彼女がその根底に深く輝ける「歓び」のイメージを持っていたこと—それは世界の善への渴望であり情熱だと評者には思われる—を、近年の研究の進展も受けつつ跡付けた本書は、ヴェイユ像を刷新するものである。専門的な閉域を作らない叙述も好感が持てる。前著『シモーヌ・ヴェイユ「犠牲」の思想』と本書に共通することとして、平凡ではあるが評者は「情熱」とその価値をメッセージとして受け止めたように感じている。是非、前著とも合わせ、本書を手にとってみられることを勧めたい。